

日本のファンタジーにおける猫

——くろぐろと広がる死の世界と、「もうひとつの価値観」への案内役

井上 征剛

現在、猫はメディアにおいて最も愛好されるアイテムのひとつとして消費されている感がある——「かわいい」鑑賞用の愛玩物として、あるいは、人間の論理・倫理が及ばないために人間を振り回す体で創出される娯楽の、「面白い」巧まざる演出家兼主役として。しかし、ファンタジーが空想の物語を単なる娯楽として消費して終わるものではなく、人間の営みに関与するものであるならば、当然、「かわいい」「面白い」というところにとどまらないものとして、物語の中の猫たちは位置づけられるべきである。ここでは、以上のような問題意識を根幹に据えて、日本の児童文学作家たちがファンタジーにおいて猫というものをどのように位置づけてきたのか、について検討を行う。

猫について、「かわいい」「面白い」というところから話を始めたが、日本において、もともと猫はそのようなものとして受け止められていたわけではないようだ。たとえば、

平凡社の『世界大百科事典』で「猫」の項を読むと、かつて日本では野生の猫は恐れられる存在として扱われていたということが紹介された上で、「このように猫が恐れられたのは、他の動物と異なつて瞳が時と所によつて太く細く変じ、また人を避け秘密があるようなそぶりを見せるからであろう」と続いている。さらに、「どこかに猫が人の姿をしてくらしている村があつて、道に迷つた者が泊めてもらつて危うく猫に姿を変えられるところを逃れてきたという話」が紹介されており、猫に対する恐怖の中に、もうひとつの世界へ引きずりこまれる——すなわち、今生きている世界から切り離される——というものが含まれていたことが分かる。また、この恐怖の根柢に猫の生霊が含まれていることは、日本のファンタジーとの共通点として注目される。猫が登場する最古の説話としてよく挙げられるのは、『日本霊異記』の中の、死んだ男が最初の年に蛇となつて家に入ろうとしたが追い出され、翌年は子犬となつて現れ